2014年
6月16日
月曜日

経済的取引と負債のゆるし

河野正道　教授（理論経済学）

マタイによる福音書には、主人から大きな借金を許してもらった使用人が、自分に対して小さな借金がある仲間を許さなかったので獄に入れられた話がある。この聖書の話は互いに許しあうことを勧めるものである。

『天国は王たちが僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。…僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出ていくと、百デナリを貸している一人の仲間に出会い、彼を…獄に入れた。…そこでこの主人は彼を呼びつけて、『悪い僕、私があわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は彼を獄吏に引き渡した。（マタイ18：22-34）』

人はすべて神に許されているのであるから、互いに許しあうべきである、と教えている。（マタイ6：14-15）にも同様の話がある。この聖書の箇所を読むと、ミードの果樹園と養蜂業者の話を思い出す。[脚注1] 果樹園の経営者は養蜂業者のミツバチのお蔭で受粉ができ、生産性が上昇する。また、養蜂業者も近くに果樹園があるので多くの蜜を集めることができる。このように互いに市場を経由せずに便益を受けているとき（外部経済を受けているという）、その対価を互いに支払い合わなければならず（これを外部経済の内部化という）、支払いあうことによって最適な生産量が実現するとミードは主張する。互いに迷惑を掛け合う外部不経済の場合も同様である。たとえお互い様であっても支払う金額が異なるのであるから、〝チャラ〟[脚注2]というわけにはいかず、差額を支払わなければならない。三者が関係する場合は、AがBに支払い、BがCに、CがAに支払うべきであるという。

ところが、先に引用した聖書の箇所は、互いに迷惑をかけ合っているのであるから、厳密に計算して弁済しあうのではなく、互いに〝チャラだ〟と主張しているように見える。このように、聖書と経済学の主張は真っ向から対立している。

ミードと聖書の主張を比較してみる。ミードでは、私利私欲・利己心をもっている人間を前提とし、その利己心を利用して社会的な効率性を求める方法を考えている。聖書では利己心を捨てて、神に従う信仰心を持て、という。この両者の見方の違いは当然である。それ以外に、ミードの主張では、彼のいう取引に伴う心理的な費用の存在が無視されていることが結果の相違に影響しているのではないか。厳密に計算して代価を支払い合い、ピリピリとして効率を高めようとするよりも、いくらであるかなど計算せず、互いに負債をゆるし合って気楽に生きるほうが精神的効用は大きい、といいたいのであろう。そのように気楽に生きていけたらよいのだが。（次回に続く。）■

1　J.S.Meade, 〝External Economies and Diseconomies in a Competitive Situation,〟 *Economic Journal*,March 1952. 熊谷尚夫著『経済政策原理』岩波書店の276ページに簡単に説明されている。

2　差し引きゼロにすること。